



皇太子が陛下なの？

母の消えてしまった記憶の中には
皇室に纏わるものも多いです。
私に話してくれたものを記録しておこうかな...と

母は奥三河で生まれ育ちました
“花まつり”で有名な場所です

別荘に避暑に来ていた方の“お手伝い”さんが
突然同行出来なくなり
秘書の方が、誰でも良いから“おくど”をしてくれないか？
と言われて、手伝いに行ったのが母でした。

時代ですから
「“身分”が違い過ぎ遠慮するべきだ」
と周りから陰口をたたかれたようですが
田舎なんで助けられる“人”がいるわけではなく
早朝から、もんぺ姿でのこのこと出かけたと言います

ご飯を炊き、味噌汁を作り副菜を作り等
朝の連ドラの一場面のようなことを
毎日続けたといいます。

で
作った食事をですね“ご主人”が
たいそう気に入り
「うちに奉公に来なさい」
とスカウトされ上がったのだそうで

これが母にとっての初めての仕事ということとなります

調べると個人情報が出てしまう案件ですけど
時代ですからね（苦笑）

皇室関係者が出入りする“家”に奉公に上がったことも
ご近所では（ご近所と言うほど近くに家もなく/苦笑）

「そんな高貴なお宅に上がるなんて、図々しい」
と叩かれたそうですが
桁違いの“お宅”なんで直接抗議できる人もなく
数枚の着替えと着物だけを持ち実家を離れたわけです

和製“ハイジ”と思って頂くといいかもですw

「なんで気に入られたの？」
と高校時代に聞いたところ
「そりゃ高貴な方だから日頃は
一番出汁で薄味のモノしか食べてなかったんじゃないの？」
と言うことでした。

お茶出し

母が上がった“家”は戦時中

皇室関係者の疎開先となっていて

十代の母にとっての“憧れ”の対象のようでした

その手の“エピソード”を聞くとたび

思い起こすのが木原敏江であります（苦笑）

いやいやホント冗談でもなく、あの世界観なんですよ

奥座敷に昭和天皇の弟が滞在して

（どちらの宮家か確証がない）

彼に“お茶”を入れたことが自慢でした。

（“おうす”のほうね）

外からは三階建てとは見えない『家』で

知る限りトイレの数は一階だけで10カ所

今なら改装して『宿』に出来る感じかな

明治村にある日本家屋より規模は大きいです

四季折々の“器”“漆”等は

日本料理店より数も多く高級品ばかり

勿論、神道で書院造の床の間があり～の...という感じ

物心つく前から正月とお盆に訪問してたので

小さい頃の私は母に

「なんで婆ちゃんが二人いるの？」

と聞いたもんです

「生みの親と育ての親だよ」

と答えてました（そう思ったかっただけでしょうね）

“行儀見習い”の憧れの【家】だったのです。

よって庶民には考えられないほどの

教育と体験が出来たわけです

生涯の自慢になるはずだったのに

痴呆が入り詳細が消えていくのが実に勿体ない

多分ブラタモリでも取材はさせて貰えないと思います（苦笑

帝都へ

奉公先の長女が

東京の大学に進学することになり

“身の回り”の世話をする係として

母が選ばれました。

“庶民感覚も学ばないと駄目”

だから、だったようです

住まいは中野に構え数年暮らしたと

この時代の話は

「家の周りは人参畑しかない」

野菜を買って来て

家の庭に腐らないように葱とかを植えると

「それやるとどうなるの？」

と〇〇さま（長女）に聞かれ

「こうするとですね、根が出て腐りませんし

株も増えますから数回食べられますよ」

と答えると

「凄いねえ...〇〇（母の名）は物知りだねえ」

と言われたそうなの。

まだ冷蔵庫もない時代の話ですからね。

小さな小さな菜園を作ってみたりしたそう。

この時代の長女さんの写真がね

クールなんだわ

黒白で長い革ブーツに黒いインバネスコートを着て

腕組みして見下ろす視線

惚れてまうやろーくらい綺麗でw

耽美好きにはたまらないテイストでした♪

そして長女卒業後

奥三河に帰宅した母の頭には

(このまま、ここにはいけない)

という思いが広がり

居心地の良い暮らしと決別することを決意したんだと

最大の理由は【お金】

二男四女兄弟の長女が

一人だけ、こんな身の丈に合わない場所には

申し訳ないし、家に援助が出来ない

(給与は出るが民間の比ではない)

ならば辞めて、会社に就職しなければ

という理由から

後ろ髪引かれる思いで辞めることを伝え

ホントに惜しまれつつ次の職場に移ったといいます

税務署と

母と奥三河に出かけるとき

あちらの方の“思い出話”に頻繁に登場したのが

【税】の話

スカウトしてくれた旦那さまが亡くなられたとき

税務署？から（←庶民なんでお世話になった事がない）

何人もの人が来て

山の【樹木】一本一本を計り、資産価値を検討し

という作業が一週間ほど続いたそうで

その間の食事とかアシストとか

無垢な娘が嘘をつくわけないということで

お茶とか入れて持っていくと

「お嬢さん、ここのお宅は、これこれこんな“モノ”はないのかな？」

とか世間話をしながら探りをいれてくるんだそう...で

そんな問いを角が立たぬように上手くかわしながら

それでも、長い間にはお互いに友情というか

共感のようなものも生まれ

(悪い例えだと拘束された人質と犯人みたいな/爆)

この意識高い系の人たちの“働く姿”にも共感したような感じで

決別を意識したんだらうと

後に訪問すると思い出話のなかで

「あの一週間は生涯で一番大変だったねえ」

と、お婆さまが何度も言うのを聞いた覚えが

話し言葉が立派な江戸弁なので

子供心に

(なんでこんなに芝居がかってんだ?)

と思いながら聞いておりました (苦笑)

グランドピアノ

幼心に

“この家は他とは違う”と思った事柄は

子供部屋（洋間）に模造紙が張り付けてあり

自由に落書きがクレヨン等のできるようになっている

そしてグランドピアノが置いてある（初見）

家に入ると直ぐに香るのが“バター”の香り

田舎にはバターも牛肉も売っていなかったw

蛇口をひねると“お湯”が出る

コーンフレークスの大箱の無糖が置いてある

庭が芝生張りで、ゴルフのショットを練習するネットが張ってある

おまけに飼ってる犬はコリー♪

ステレオ設備が完備されて

子供部屋は洋間にベッド

目覚まし時計は鼠ランドのバンビちゃん

(お子さまは入っちゃダメです)のご主人の書斎がある

お昼に尋ねると‘かつ丼’とか“天井”とか出前ができる

道路から格子戸を抜けると玄関までの距離があり過ぎるw

というのを記憶してますw

今でもきしめん市の高級住宅街に“お宅”があった頃の記憶

私にとっての【黒船】的存在で

レコードにプレイヤーを母が風呂敷に包んで

物欲と共に持ち帰って（苦笑）

それを利用して沢山のクラシックを聞いたのが

私にとっての音楽との出会いでしたw

持ち帰ったレコードの中には

“ゴルフスイングのレッスン”なんてのもあったのです。

頂いた次の日から

毎日針を落として聞いていました

幼稚園に上がる前だったん...よw

いい思い出だわあ〜♪

【自給自足で何とか】

幼心に

“この家は他とは違う”と思った事柄は

子供部屋（洋間）に模造紙が張り付けてあり

自由に落書きがクレヨン等でできるようになっている

そしてグランドピアノが置いてある（初見）

家に入ると直ぐに香るのが“バター”の香り

田舎にはバターも牛肉も売っていなかったw

蛇口をひねると“お湯”が出る

コーンフレークスの大箱の無糖が置いてある

庭が芝生張りで、ゴルフのショットを練習するネットが張ってある

おまけに飼ってる犬はコリー♪

ステレオ設備が完備されて

子供部屋は洋間にベッド

目覚まし時計は鼠ランドのバンビちゃん

(お子さまは入っちゃダメです)のご主人の書斎がある

お昼に尋ねると‘かつ丼’とか“天井”とか出前ができる

道路から格子戸を抜けると玄関までの距離があり過ぎるw

というのを記憶してますw

今でもきしめん市の高級住宅街に“お宅”があった頃の記憶

私にとっての【黒船】的存在で

レコードにプレイヤーを母が風呂敷に包んで

物欲と共に持ち帰って（苦笑）

それを利用して沢山のクラシックを聞いたのが

私にとっての音楽との出会いでしたw

持ち帰ったレコードの中には

“ゴルフスイングのレッスン”なんてのもあったのです。

頂いた次の日から

毎日針を落として聞いていました

幼稚園に上がる前だったん...よw

いい思い出だわあ～♪

アパートへ

家の東にあった井戸で
新婚さんがタライに洗濯板・石鹼で
毎朝、私とおしゃべりしながら洗濯をしていた

そんな家庭に洗濯機が入った頃

木造の社宅に居を構えるむ家族は

順次鉄筋コンクリー五階建ての集合住宅へ
移動することとなりました。

多分、国鉄が一番活気を持っていた時代かと。

我が家も一号棟と呼ばれる棟の一階に

移動することになりました。

引っ越しはご近所の方が

総出で手伝うのが習わしでした。
荷物を入れたあと、空っぽの子供部屋には
私が描いた一枚の“絵”が壁に残され

それを見てものすごく寂しくなり

私は泣きたい気分になりました。

子供ながらに何もかもが

“消える”こともあるんだ。

と感じました。

団地の一階は

なんというか語弊はありますが

建築の人間が、まだ設計に慣れていないというか

なんというかw

(“なんというか”をもっと増やしたい気分/苦笑)

地面がむき出しで冷えて

そこからゴキとか進入するような出来でした。

二号棟、三号棟と新しくなるほど改善されていく感じで。

三号棟は役職の人のためのモノでした。

三号棟になるとトイレも洋式となり玄関を開けると飾り棚が

あったりして公団のような趣となっていました。

さらに四号棟は間取り的にも広くて

古い棟に住む住人は不公平感を味わったものですw

(引っ越してくる人間にとっても)

コンクリートの住まいも

生活してみると

木造の平屋の生活よりは快適です。

密封性が強く暖かいですから

で、

一時的なノスタルジーは消えるかと思いましたが

独特の寂しさは、今でも思い出すと泣けるほどの

インパクトがありました。

内職

時系列的に分かり辛いんですが（記憶が曖昧）
平屋建ての頃に始めた内職を
本格的にやり始めたのが団地に移った後でした。

畑を耕作する必要もなくなり時間的に余裕ができ
将来に向けての資金の必要性を感じたんでしょう。

その一方で団地の裏手で
平屋から移した沢山の植木や植物も趣味で育てていました。

小さな菜園も作り近所の人に
「必要な時取っていても良いからw」
ということを書いて
紫蘇やネギ等の薬味を提供していました。

母がしていた内職はパジャマの縫製。
冬は“ネル”夏用には“サッカー”（しじら織り）

私たち兄妹が小学校の頃は三畳間が
兄が中学に入ると三畳間は兄の部屋となり
内職はダイニングキッチン横の六畳間へと移動しました。

私はアレルギー持ちなので
冬のネルの刺激臭は辛かったです。
でも仕方なかったですね。
絶対的に“お金”が足りませんでしたから。

ミシンが足踏みから電動へ
そして電動モーターも順番に大きくなり
官舎を出るまで内職は続けられました。

景気が良い時は、母がリーダー的存在になり
五人程度の主婦に仕事を回したりもしていました。

縫製の社長にとっても、くどくど説明しなくていいくらいのベテランと

なっていたので重宝がられました。

繊維不況で内職の賃金が延滞したときは
内職の仲間で督促に工場を訪れたりしたようです。

曰く

「会社社長との交渉は、昔よくやってたから慣れていた」
そうな

今、この血気盛んな頃の記憶が
“パジャマを縫ってた”程度にしかありません。

この僅かに残された“記憶”があるかどうか？
も痴呆進行の目安となってます。

ホントにね

なんだか妙な感じです。

“ねぐら”もしくは“お宿”

官舎では

「一号棟に“主”がいるから

挨拶しておいた方がいいよwww」

なんてキャリア組からも冗談みたいに言われていました。

でもあながち嘘や冗談でもなく

リアルで新人キャリアの人は我が家に泊まりに来て

食事して吞んで泊まっていったことも多々ありました。

実家（都会）を離れて地方で暮す人にとって

暖かい食事ができる“家”というのは

貴重な存在であったようで

深夜に来訪しても歓迎する“我が家”を

大事に思ってくれたようでもあります。

平屋の住まいのときから団地までの時代

“お盆”は来客が絶えたことがありませんでした。

地元の徹夜踊りのとき

平屋の二間の部屋では全員一度に眠ることができないので

順番に仮眠を取りながら

河原まで出かけて踊っていたようです。

二段ベッドに眠る私の隣にも眠る人がおりましたw

クリスマスの時期には

来客が私の枕元にりんご一個（当時は高級品）とか

鹿皮の小銭入れとか田舎では手に入らない

チョットだけ贅沢なプレゼントが置かれてました。

“お盆”の宿泊者が一番多かったのが

団地に移り住んだ小学校4年生のときで

我が家の親戚（父・母）と職場関係者がかぶってしまい

3LDKに子供を含め35人も泊まる事になり

寝る場所を確保できない私は

ベランダに折り畳みベッド&ネルを繋ぎ合わせた毛布を持って

一晩を過ごしました。

これがね意外と快適で
ハックベリーフィンもしくはスナフキンのような生活に
憧れていた私には

一生これでも良いのになあ...

なんて馬鹿なことを思ったもんです
(蚊さえいなければw)

後に当時我が家に来て出世したキャリア組の人の
“思い出話”にこの頃の出来事を
告げてくれる人がいて嬉しかったですよ。
今頃、彼らも退職してることでしょうけれど。

同級生で就職して
ここに住んだ男子は
妻が不満をこぼすと
「〇〇は、ここで高校まで生活したんだぞ」
と苦言を呈したそうです（苦笑）

健康オタク

母は大変な健康オタクで
セレブのお宅にいた影響もあり

流行りものの調理器具は必要を感じると

直ぐ購入するタイプでした。

万能鍋からジューサーミキサー等料理を振る舞うことが

多かったのでキッチン小物も沢山ありました。

“スムージ”と最近は言いますが

ジューサーで毎朝野菜ジュースを作るのも日課でした。

食物繊維云々については、自身が便秘症ではないため

考慮してないですけどねw

三台以上ジューサーミキサーを潰しました。

若い人は揚げ物が好きなんで

揚げ物をよく作り台所は油汚れが酷かったです（苦笑）

味の評判は良かったです。

炭酸水が家でできるなんてのも買ってましたが

これは合わなくてあっけなく破棄。

考えてみると昭和一桁の人間って

目新しいものが出ると直ぐに買っていた記憶が。

料理グッズではないけれど、笑えちゃうほどダサイwカツラとか。

うちは父が仕事で車を使用するのと

仕事以外は呑みに出るので

「免許を取ったり、車を買ったりすると

絶対に迎えに来いと言われるから取らない」

と頑なでしたが

父が亡くなって直ぐの頃は

「免許持っていたら買い出しに一人で行けるのに」

と悔やんでました。

そんな事も全て忘却の彼方ですけれど。

つらつら書き込み、何が言いたいのかというと

痴呆というのは

良いことも悪いことも全て消して

来るべき“別れ”の日に

執着を残す必要がないという

配慮を感じます。

すべての人が痴呆に陥るということはないけれど

“穏やかな”痴呆であればあるほど周りは救われると。

なんというかできるだけ穏やかに

誰もが逝ける時代になるといいかな...と願うばかりですよ。

正直入院してる病棟の後期高齢者の方々をみるとね

考えちゃうよね。

多くの病院スタッフが懸命に

居心地の良い空間を作ろうとする努力をしてる

その姿に頭が下がる思いです。

“老い”だけでなく

誰もが医療機関の世話になることがあります。

だんでもかんでも“経済”とか“効率”で測ると

とんでもないことになると思いますよ。

事実もう既にいろいろなところで

軋みが出てるように感じる今日この頃です。

奥三河の家に私たちが出かけると

「よく来たねえ」

とお婆さまから台所で挨拶され

茶筒のような缶から

お菓子を渡されました。

「これを犬にあげてきたら良いよ」

と言いながら。

犬が好きなことを知っていて

まず一番喜ぶであろうアトラクションを

用意してくれて

私は、喜んで渡された菓子を

犬にあげに内庭に出てました。

“奥さま”と呼ばれていた人は

大変料理上手な人で

私は子供ながらに

彼女の包丁さばきが好きで

調理中、横に立ってずっと見てました。

泊まった翌朝の汁物は

決まって鯉こくで

(なんでだろうな?)

と思っていたら

最近(と言っても10年はたってますが)になって

奥三河に出かけることが決まった時は

亡くなった父が飛騨川で鯉を釣り

それを手土産に持たせた

という話題になり

(それでか...)

と納得したものです。

鯉を俎板に置き鱗を取り

はらわたを取り出し三枚に下す。

取り出した内臓は飼っていた犬の餌になり

切身の一部は刺身に

そして粗が翌日の朝の汁ものに出されていたわけです。

川魚というか、魚嫌いだったので
私は一口も食していませんが
大人になった今
食べてみたい一品であります。
絶対に美味しいと思います。

魚嫌いの私達子供には
豚カツが出されました。
お肉屋さんで買い物を頼まれたこともあります。

「〇〇さんのお宅ですね、ではこれを...」
と言って肉だけ受け取って
帰って来れるほどの上得意さん。

買ったのはお店で一番高いと思われる上ロール。
これの筋を包丁の背で叩いて
小麦粉・卵・パン粉の順につけて
たっぷりの新鮮なサラダ油で揚げる。
糸のように細く切った千切りキャベツと
キュウリとトマトとパセリと共に盛り付けられて
これが今でも思い出すと
涎がこみあげてくるほど美味しい一品でした。

ナイフ&フォークの使い方とかの
テーブルマナーも教えてもらったなあ

私にとっての奥三河の“お宅”は
美味しいものが食べられて
犬と遊ぶことの出来る田舎でした。

帰宅したあと
一か月は「うちのご飯は美味しくないねえ」
と母に言ったものです。

「だって材料費から違うからしょうがない」

と母は笑ってました。

母の現状

2019年12月28（日）現在

母は要介護1 痴呆ありの状態で岐阜県の中農地区に一人暮らししています。

私は毎日モーニングコールをして現状を確かめています。

確認事項は90-7の計算・曜日確認・昨日の記憶等10分程度の談話での会話です。

幸い自動車を使用すると90分程度の距離なので、何か問題があると直ぐに会いに行くことができます。

被害妄想も徘徊等の問題行為も今のところはありません。

週3回のデイサービスと週三回のヘルパー訪問です。

母の母も最後は痴呆でした。寿命は、大病さえしなければ、まだ10年以上あるでしょう。

今後何があるか分かりませんが、気長に付き合っていく気ではいます。

が、私自身も“歳”なので自信がありません（タフじゃないので）

大変ことは全て【人任せ】の状態なので申し訳ないのですが

母の青春時代の記憶を残しておきたくてブログに掲載し、それをここにまとめました。

トレーニング小屋

父は、盲腸・胃癌・大腸癌・脳溢血・脳梗塞という病歴の持ち主でした。

心臓発作で亡くなるまで八回の入退院を繰り返しました。

脳溢血で倒れてからは

大好きだった【お酒】を呑むことを止めました。

禁煙は

お酒が入ると煙草が吸いたくなるようですが

周囲の協力と母の怒鳴り声と

実力行使で成功したのです。

アルコールはねえ。

蟒蛇家系でしたから。

父の兄は最後の最後までアルコールも

煙草も飲めていたのにね。

お酒を止めた父は

健康診断の結果をみて

生活習慣病の改善に乗り出しました。

完全リタイヤして時間が出来ましたから。

TVの前に座り続けてたり

布団の中でゲームばかりしてると

母のヒステリーが加速するせいもあります。

木造の二畳間ほどの倉庫に

ペットボトルに水を詰めダンベル。手すりにゴムバンド。

円盤型のツイストマシーン

足首に負荷を付けての踏み台昇降

こんなメニューを午前と午後30分ほどかけて

毎日の日課にしてみました。

休むのは正月一日のみ。

よほど体調が優れない日を除いては続けてました。

冬の凍えた冷たい手で私の手を掴み

「冷えてるだろう～今日は、凍えるぞお」
なんて茶目っ気がたっぷりな会話ばかりをしてました。

トレーニングをするようアシストし道具を用意したり
“尻”を叩くのも母の役目。

「〇〇さんは（私たち兄妹は母のことを中二病の頃から名前です）
爺ちゃんには厳しく当たってたのに自分には甘いのねえ」
というと
「そんなことあったっけ？」
と惚けてる分けでなく
記憶に残ってないのに呆れるばかりです。

くちびる

2018年12月11日から20日の間

私は全身麻疹を使用して
舌を切除するという手術を
地元の病院で受けました。

入院中困ったことは“乾燥”

病院は空調がエアコンのみで

乾燥している。

そのせいで唇の荒れが酷い
ぼろぼろと皮がめくれて血まで出る始末。

幼稚園に上がる前に

同じようにひどく荒れたことがあった。

心配した母は私を木澤病院へ連れて行った。

往診した医師は

「そんなものは蜂蜜をつけて置けば治るから」

と言って帰された。

症状は治まらずますます酷くなる。

酷くなる一方の荒れに困り果て

次に向かった病院が

岡田病院だった。

女医さんは

「沁みる薬を塗るから、お母さん抑えていて」
と言って薬を塗る

塗られた瞬間、火傷のような痛みを感じた私は

母の膝から逃げるようにずれ落ちながら

身体をねじったが

母と看護婦に抑え込まれては逃げようがない

処置されたときの“痛み”は
今でも、ぞくぞくとした感覚を持って思い出すことができる。

一度塗っただけで完治したというけれど

完治したときの記憶はなく

ただ蛍光灯の白い光と白衣、

身体のうなりと痛みの記憶しか残っていない。

「岡田病院の女医さんは名医だった」

と語るときに出るエピソードも

母の記憶からは消えた。

こうして記録するとき

その女医の姿が朝の連ドラの女優の

姿になってしまうのが悲しく怖い。

乳酸菌飲料

木造の官舎に住んでいた時代
兄の世代がガキ大将となっ
てご近所に配達された

“乳酸菌飲料”を盗んで（申し訳ない）
4～5人で飲んで瓶だけ返す

という悪さが流行ったことがありました

当時“乳酸菌飲料”を取るお宅は

チョッとセレブな家庭か

腸内環境という新しい栄養素（概念）を理解する

新婚家庭に限られていて

今のように浸透してはいませんでした

美味しくて駄菓子にはない味に魅了され

勿論悪いことと分っててやってるので

瓶を持って人通りの少ない家の陰で飲むわけです

これを悪行自慢に取られると困るんですが

1965年～1968年の頃の田舎ですから

年功序列ではないけれど

子供の間にもヒエラルキーは存在しw

年上の男子から飲み始めるので

下の世代は、なかなか味わえません

悔しく思った私は

今まで一度もまわってきたことがない

あんなに美味しそうに飲むんだから

不公平だ

私だって飲んでみたい

優しい新婚さんのとこのだったら

見つかってもしゃべればなんとか

許してくれるかも...

ということを考え

母が買い物に出かけるという

天気の良い午前中

母が出かけたのを確認してから

決行しました...

ら、

やはり悪いことは出来ません。

駅前に買い物に出ていたはずの母が

財布を忘れたらしく自転車直ぐに帰宅し

目ざとく見つかり

“乳酸菌飲料”の瓶は

飲む前に取り上げられ

没収され元に戻され

私は腕を引きずられ帰宅

縁側で鬼の形相wをした母に

ほうきの柄が折れるまで

尻を叩かれたのです

叩かれた尻は赤く腫れ

涙を流しながら許しを乞うたんですが許されず

その夜は風呂に行けないほどの傷が出来てました

その後、成長して思春期を迎え

「私のしつけは厳しかった、兄が盗みを働いたときも...」

って

私が受けた罰の記憶が、兄にしたこととなっていったのです

記憶が上書きされてしまっていたのですね

思春期、兄にばかり甘い母親のくせに...

という非難に対してのいつもの答えでした。

それ私だし...

と言っても譲りませんでした（苦笑）

ま、

その記憶も今ではすっかりと消え去り

おだやかな“痴呆”の貴重種となってるんで先のことは

ほんとにわかりませんね

母が忘れたんで、私の気持ちは返って楽になりました

覚えてないことを攻めても意味ないですから

こうして幼児期に受けた

小さなトラウマが消えていくんですね

ありがたいことです...かね？（苦笑）

誕生日

母は長女だったので
弟と妹たちが生まれるときの
出産の世話もしたという

取り上げるのは、今は亡き母の父で
お産の後に出る胎盤とかを
埋めるとかの雑用を引き受けていたと聞いている

母の父の実家は三河の富豪だったので
交際は認められず
身分違いの“恋”に陥った
祖父と祖母が駆け落ちをして
初めて生まれた子が母だったので

この手の話も当時は、よくある話のようですが（苦笑）

祖父と祖母の結婚は
母が産まれたことにより認められ入籍出来た
祖父を前に
「産まれてきた“赤ん坊”を父なし子には出来ない」
と祖父の母親が言ったという

彼女は、女の子に恵まれなかったので
母の誕生を喜んだようで
母だけが綺麗な産着を着せて貰え
三歳ぐらいまでは
当時庶民の口に入らなかった
鯛や蟹などの珍しい品を
食すことが出来たという

母が産まれたことにより
入籍が認められたので
母の誕生日は
公式には1933年3月だけれど
現実には1932年9月だという

そして曾祖母の“縁”も
完全に途絶えることとなった

縫製工場

【縫製工場】

縫製会社に就職した母は

ひたすら糸を紡ぐ機械の番人となるw

ほとんどが女性の職場

会社の福利厚生は充実し寮も完備

仕事を終えたあとは

週一で“お茶”と“お花”を習う

労働組合にも入り、会社の上層部とも掛け合ったり

したという

話が若干盛ってあるような気がしたけれど

結婚して会社を辞めるときは

「労働組合からは会社からの圧力が

あったのではないか？」

と、心配され

会社からは

「何が不満なのか？改善するから」

と言われたらしい。

時代が時代だけに

そういう風に言われても不思議じゃない

私達が幼児のとき懐かしく思ったのか

私と兄を連れて工場に出かけ

工場入り口の噴水のところで

昼食を取った覚えがある。

工場側からみたら明らかな不審人物だから

「どうかされましたか？」

と聞かれていた（職質だわな）が

「結婚する前に働いていたんです」

と告げると

「そうですかぁ～今は機械化が進んで

当時のような人はいないんですよ」

と言われ

思い出話と雑談を数分していた。

「いいお天気ですから、ゆっくりして行って下さい」

と言われていた。

のんびりした時代だったんだ。

なんでそんな場所に行ったか？

聞いたことがないけれど

思うに、生活疲れだったんだな。

結婚・子育てという生活に疲れて

過去の栄光にすぎるといふか

亭主よりも稼いでいた時代を振り返る感じが

なにせよ

生活苦に埋没していく自分への癒しだったのかな

【ザ・ピーナッツ
】

母の消えてしまった自慢の一つに

デビュー前の“ザ・ピーナッツ”に会ったというものがあつた。

今、ウキさん読んだらこの二人

常滑出身だったんだねえ

どこの“家”で見たのかは不明ですが

(だって本宅の他名古屋・東京&どっかに家があったから)

渡辺社長と共に来てたらしい

でメイド(これに統一するかw)だったから

お茶(洋菓子と紅茶)出しをするわけで...

曰く

小さくって同じ顔でw可愛かった

という

そんな非日常的な生活が

楽しかったって

今朝の電話でも言ってたな

中野時代の記憶は、まだ消えてないそう

いつまで持つのかな十代の記憶

野球小僧

父は野球が好きで自身も
ファーストを守っていました

職員によるクラブなんですけどね
今は、自動車学校になってる所も
過去はグラウンドがありまして
其処でもプレイしたことがあるそうです

仕事の始まる前の
早朝4時頃に同好の志が集いゲームを楽しみ
洗濯物を抱えて帰宅し風呂に入り
職場に出かけるということを
退職するまで続けて
大量の汗と泥の沁み込んだ洗濯物を
母が洗って干すというwww

試合があるときは
沢山の握り飯を
(withから揚げ&卵焼き&ウインナー)
を作り持たせて振る舞う
そんなこともしていました

そんな事ばかりしてたので
我が家には一升炊きの炊飯器が
二台揃えてありました

一人暮らしをするようになった母は
二合炊きとかに慣れなくて
習慣でつい五合とか炊いてしまい
ヘルパーさんに小分けして冷凍して貰ったり
忘れないように紙に注意書きをして
貰って貼ったりしてますが
なかなかね（苦笑）

父は退職したあとも素振りとかしてましたし

高校野球も地方戦から見学に出かけたりと
心底好きだったようです

“野球小僧に会ったかい？♪”
の歌詞そのものですね(#^.^#)

居合道

父の弟は“居合道”の名手で
何かの大会で優勝したとき地元メディアに取材され
写真と共に紙面を飾りました。
兄弟の中で一番のイケメンと親族中で言っていて
地元の名家の婿養子に入りました。

古い蔵には、鎧に兜、古書、古銭等
時代を感じるものばかりが置かれていました
(この蔵の様子がヒカルの碁を読むときのイメージとなりました)

地主ですからその気になれば自給自足の生活が送れます。
ただ残念なことに叔父は若くして交通事故で亡くなりました

国道沿いに置かれた“岩”に激突し...
その思い出は“パブ”の方に作文を書いて残してあります

もう時代が違いますから書き込みますが
(以前にも書きましたけれど平成最後なんで/苦笑)

当時から言われたのが

叔父は助手席に座っていて
運転をしていたのは別人の同乗者で

彼は飲酒をしていたので運転を誤ったのでは？
ということです

“死人に口なし”
ではないですが

生きてるモノが背負うには重すぎる
“罪”
ということで
警察の判断で運転をしたのは

叔父ということに...

ということです

状況的にみても叔父は被害者であり

同乗者が加害者であったと

当時（70年代後半）は交通機関が

都会ほど発達しておらず

タクシー会社すらない田舎ですから

そういうこともあったのだと

残された2歳児と未満児の子育てをするために

叔母は町役場の仕事に付き

苦労し続けて子供を育て上げました

家庭を訪問すると

勝手口の窓からバケツで水を

浴びせかけられたこともあったそうです

辞めたいと弱音を吐く叔母に

伯母の両親は

「大変だろうけれど

明日一日だけ仕事に行ってから

考えてみたらどうか？」

と言って励ましたといいます

今は退職して

そんな事も笑い話となり

二人の子供も立派に成人して

孫にも恵まれ幸せな日々を

過ごしてはいますが

“縁”を切ってもいいと思われる今でも

叔父の親戚関係の法事や確定申告の書類書き等

細目に世話をする優しい人であります

母が痴呆認定を受けた年
私はたまたま帰省をしていて
疲れ果てて横になった
数分の中に電話が鳴り
（ああ...折角ひと眠りできるところだったのに...）
と思って出た相手が彼女でした

電話の内容は亡くなった伯父の法事の件で

「明日迎えに行こうと思ってるけど行くよね？」
という確認で
その一本の電話のお蔭で
法事をドタキャンすることなく
我が家の近況も親族に伝えることが出来たという
『偶然』にその日は驚いたものです

「そうなのお
うちは孫娘が結婚することになってね
もう少ししたら
“おお婆ちゃん”になるところなのよ」
と明るく笑ってました

人は、いろいろ言いますが
『終わりよければ』なんてことではなく
人には、それぞれ沢山の物語が書けるほどの
エピソードがあるものです

口にはしないだけで。
私にとって彼女は
手本にしたい尊敬すべき人の一人でもあります
（彼女も色白美人で清楚なお嬢様タイプなのよ）

釣り

父は釣りも好きでした
土産に毎回鯉を持たせることが
出来るほどでしたから

川釣りだけではなく
海釣りも楽しみ
出かけたところが良い所だと
「子供たちも連れ行くと良いな」
なんて言いながら
船酔いをする頃には
「やはり子供には無理だ...」
とってしまう節があったようです

釣った魚の調理とかを
職場では捌いたりしていたようで
同僚からは、父の料理の腕を買う人も多くいました
(味ご飯とか茶碗蒸しとか泊まりのときに作ってた)

リアルだと釣った魚を
自宅に持ち帰ると
“手が生臭くなるから”
と調理を嫌う人も多いのが現実で
行き場を失ったさまざまな種類の魚が
我が家に持ち込まれました

「あそこなら食べて貰えるから...」
と(*▽*)

なので実家の冷凍庫は
父が存命中は鮎やヤマメ等の冷凍モノが
途切れたことはありませんでした

それらを調理するのは、勿論母でしたけれど

孫娘が産まれてからは

釣り堀に出かけ

レジャーとしての釣りを楽しんだものです

どこの爺さまも

「そんなもんじゃない？」

というのが私たち世代の感覚です

自転車修理

母方の祖父も、また技術肌の人でした

冬に我が家を訪れたときは

「子供たちにブレーキの効きの悪い

自転車を乗せてるなんて

こんなに危ない事はないぞっ」

と言いながら

自転車のブレーキの修理と

タイヤの薄くなったゴム部分の

補強をしてしてくれてました

ちょうどその時期

珍しく積もるくらいの雪が降り

祖父の“はんぶんあおい”市の印象が

冬は雪が多くて底冷えする土地柄

というものになってしまいました（苦笑）

一緒に来ていたのは従妹で

父がニラの入ったおじやが好きだったので

それを一緒に食して

帰宅したあと祖母から

「〇〇〇（←母の名前）のここでは

何かご馳走が出たか？」

と聞かれ

「ニラのおじやがでて美味しかったよお」

と何度も答え、話題にしていたと言います

そんな彼女も今では三児の母であり

ヘルパーとして老人の面倒を見ています

後妻に入った人が厳しい人だったので

“嫁入り支度”をして貰えず

彼女の訪問着やら何やらを用意したのも父でした

結果的に父は私と彼女

二人の“嫁入り支度”をしたこととなります（苦笑）

みーこ

母の父は

子供が独立してから寂しくなったのか

猫を飼い始めました

三毛猫でした

動物嫌いかと思っていた

“父親”が猫を飼い出し

“みーこ”と名付け

可愛がる姿に親族は

「人間というのは変わるもんだな」

と話していました

“みーこ”は祖父の眠る布団の隅で眠り

人が来ると天井裏に隠れたりして

なかなか他の人には懐きませんでした

毎朝、布団に座り

“みーこ”に向かって

「ちえちえちえ（舌打ち）...乳（ちち）飲むか？」と

言って小皿に自分の牛乳を入れ与えてました

朝餌を食べたあとは

外に散歩に出て

夜帰宅を鳴いて知らせる

“昔ながら”の外飼いでね

“みーこ”は親戚や従姉が

集まるとイライラして爪を立てるような猫でした

夏休みのある日

私は暑さに負けて横になって眠る

“みーこ”の横で

“みーこ”に布団のかわりにタオルをかけて

顔を見て楽しんました

そうしてるうちに私自身も

知らぬ間に寝てしまい

目が覚めるとかけていたタオルだけが

残っているのを見て

寂しく思った記憶があります

祖父が長男と同居するとき
移り住んだ家にも連れて行き
大切に育てていました

が祖父が亡くなったあと
祖父を探しに出かけたかのように
ある朝突然家からいなくなってしまいました

親戚中が
「祖父の以前住んでいた
社宅に探しに行ったに違いない」
と法事のとくに語り合いました

母の記憶からは綺麗に消えてますが
“みーこ”の細長い尻尾を
掴み振り回していた母にも
懐いていたのが不思議です

「わたしゃ猫は嫌いなんだぞ」
なんて“みーこ”に向かって
話しかけていたのにね

痴呆のに入った今は
「そんなに酷いことしてたの？」
と言って笑ってます

ニンニクの茎

私の祖母も“畑作”の腕は良かったです
元気な頃は
手押し車に鍬などの道具を入れ
借りている畑に出かけ
必要な野菜を作っていました

私的に一番のお気に入り
は
ニンニクの茎でした

母からの

「ニンニクの茎は
美味しくって使い勝手が良いから
沢山作って」
というリクエストに答えるように
毎年沢山のニンニクを植えてました

今思えば本当に贅沢なことでした

祖母も

晩年は痴呆に陥り
最後は赤子のように
手にミトンをはめて
それを“はむはむ”と
赤子のように齧っていました

大人も齢を取ると
ホントに赤子に帰るのですね

たくさんの無償の愛を感じていた
ので
そんな祖母の姿も愛おしかったです

社会的入院をさせてくれる
人道的な病院（医師）に世話になれたことが
幸いなことでした

現在の母は

痴呆の入った祖母の最後も

すっかり記憶から消えてしまっているの

で痴呆に対しての危機感も薄いです

ラッシー

私の記憶にはありませんが
私がまだ“むつき”をしていた頃

私は
母が目を離すと一人で
とことことと
外に出かけてしまうような
幼児だったと言います

出かけた先は決まって
ご近所コリーのところで
そこは高級官僚の社宅でした
(当時は名犬ラッシーの影響で
コリーが人気種)

「あそこの犬は人を噛むから
小さい子供は注意しないと」
と言われていたと言います

母が私を見つけたとき
私はコリーの首に手を回して
抱きつきそのまま眠っていたと言います

幼児に抱きつかれたコリーは
助けを求めるような目で
飼い主と母を見上げて
“くう～ん”
と鼻を鳴らしたそうで
それを横目に見ながら母たちは

「猛犬にも勝てない相手がいのねえ...」
と、談笑たそうです

車が皆無で舗装もされていないw
田舎ののんびりとした

お天気の良い午後の話だったとか

母は今になって

この記憶も消えましたが

私にとっては

今現在味わいたい体験ですね(´艸`)

宿題

兄が小学校時代
内職の“糸切”をしながら
“詩を書く”宿題に悩んでいた
国語嫌いの兄に
「例えば“柿”をみたとして
“柿”の呟きとか考えてみたら？
と言いながら
速球で

『僕は渋柿
隣の甘柿君は
みな喜んで貰われていくのに
僕にはだれも見向きもしません
でも
冬になる頃
白い粉をふいて
甘い干し柿になるのです』

と語り

こんな感じのを
書いて提出したら良いんじゃないの？」

みたいに言った言葉を
そのまま
兄が原稿用紙に書いて提出したところ
先生がいたく感動し
文集に乗せてしまった
という記憶も消えていますw

手芸（家庭科）嫌いの
私の宿題のパジャマやスカートを
縫ってくれて提出したら
先生に
「玄人はだしだねえ（にやり）」

と言われたものの合格点をくれるような
のんびりとした時代でしたねw

ロフトベッド

母はなかなかのアイディアマンでした
抱き枕が売られる前に
父のために
もみ殻と茶殻の入った
抱き枕（150cm×40cm）とカバーを作り

収納の少ないアパートの時代に
二段ベッドの上をベッドに下を個室にする
という作業をしてくれて
個室を持たない私の不満を
解消することをしてしてくれました

ベッドの上の収納棚は
あっという間に少女雑誌の月刊誌で
埋め尽くされましたけどw

その時特許とか商標？にでも
登録してたらねw

通販や家具売り場にあるものは
大体が既に
“名もない誰か”のアイディアに
過ぎないということですね

ただ
商才(商魂)があるかないか
だけのことのようにです

メロンソーダ水

アパートの時代

母が懇意にしていた

今でいうママ友家族と

一日中電車に乗るという

マニアックな旅を経験したこともありました

どちらも一男一女の家庭で

手作りのお弁当・お茶、そして飲み物を持って

高山線に乗り込み富山まで行って中央線で帰るという

‘乗り鉄’垂涎の行程？でした

途中下車をすることもなく

ず～と車内にいるというw

今考えてみたら子供に取っては過酷な工程ですが

仲の良い間柄でしたし

何より何故だか、みんな乗り物大好きなメンバーでした

(だからこそ企画されたのか/苦笑)

鈍行での旅だったので時間はたっぷり

トンネルの多い区間はゲームを楽しみ

車窓に流れる景色に溜息をつき

夏だったので喉もかわきます

そんな時、母たちが用意してくれた

飲み物を頂くのですが

ママ友の飲み物は当時高価だった

“身体にピース”でした♪

ただ残念なことに氷（当時は貴重品）が

入れられておらず

粉末の緑色したメロンソーダを用意した母の方には

氷がふんだんに入れられ冷たくて

のど越しも良くて、子供たちから称賛を浴びたのでした

子供って残酷ですね

「どうして氷入れてこなかったの、お母さん」

とか言っちゃうんだから

苦笑いしながら

「ほんとだねえ、思いつかなかったわ」

と言いつつ“身体にピース”も

ソーダも飲み干され

用意したお茶も無くなり

夕食には当地では手に入らない駅弁を頂き

眠い目を擦りつつ中央線の乗り継ぎながら

帰宅したのでした。

この旅で初めて高山線と中央線を

走破できたのでした☆彡

今は、思い返すだけで

疲れる歳となってしまいました（苦笑）

汽車

大阪万博の頃

日立 ポンパ号という汽車が地方をまわっておりました

子供の頃の記憶ですから

(夢かな?)

と思ってましたが、友人に聞いてみたところ

「いや、間違いなく駅にとまっていたよ

今の生活を予測してたよねw」

って...

中央と地方の落差の激しい時代

幼い私の手を引いて母は

昭和天皇に手を振りたいために

線路わきに陣取り

昭和天皇の乗る汽車を待ったものでした

【平成】の時代になっても

普通列車しか止まらない地方の駅で

あっという間に通り過ぎる特急に

母は、心を込めて手を振っていたのでしたw

帝都都民には記憶にすらのぼらないけれど

地方においては、記憶に新しいのが汽車であります

むせかえる蒸気、重く深い煙

嫌になるほど長い時間、待たされる踏切

ついこの間の事のように思うけれど

もう、半世紀も前のできごと

子供の頃の記憶ですが

昭和天皇は、テレビの映像のようで

“皇室アルバム”そのもので（苦笑）

穏やかでのんびりした日常が思い出されます(#^.^#)

あんなにミーハーのように浮かれていたのにな

ぜ～んぶ記憶に残ってないんだって

ほんとに意外(´・ω・`)

予測不可能なんだよね、未来というのは

...なんだかほんと勿体ないことだよね

うら山

産後の肥立ちが悪くて実家で世話になってるとき

うら山に軽い散歩に出かけていました

“軽い”といっても“山”ですから高低差はありますw

私に無理はさせまいと母は孫娘を抱いて

二人でのんびりと森林浴

春の日差しが降り注ぎ

それは最高の休暇でした

母は顔にまつわりつくように飛ぶ羽虫を叩きながら

さまざま事を愚痴る私に

「殺生はしたくないけれど赤子を守るためには殺生もしないと」

と言い急に空を見上げ

「ほら、あれ木の上に...」

と指をさした樹木の先には

一匹の栗鼠が樹と樹の間を駆けていたのでした

通りすがりの下草刈りの男性も

「おお...ここら辺でも珍しくなったなあ...」

と話し、まるで事情を全て察したように

「大事にしないとな」

という会話を交わしたのです

30年経った今

うら山には柵が張られ登れなくなり

地権者は倒産し差し押さえられ

全てが半島系のモノとなりました

...色々危ない時代となり

危機感を私は覚えますけれどね

猫の世話

2019年9月26日

要介護1（痴呆あり）の母に毎日モーニングコールをして
痴呆の進み具合と健康状態を確認してます

確認事項は90-7or8

10からのカウントダウン

基本的な個人情報等で

雑談もいろいろします。

その中で

[猫飼いだしたよ]

と毎日のように母に告げるのですが

「なんで猫なんか...私は猫が嫌いw」

と毎日言い放ちます（苦笑）

という母も痴呆が入る前は、私たちが留守にしているときは
猫餌の補充と猫のトイレの掃除に何度も来てくれました。

母は昼頃に駅のコンビニで“おにぎり”を2個買って
居間で座って食していると当時飼っていたキジトラだけが現れ
母の様子を窺ったと言います

「お前、偵察に来たのか？サバトラとはちわれは？www」

と語りかけて食事を済ませ

猫の世話の他掃除機で軽く掃除をして二階に上がった時
家具の裏に隠れていたはちわれをみつけたことがあります

「そんな処におったのかw怖がらせてごめんねえ掃除機かけさせてね」

と話かけていたことを楽しそうに私に話していたので

その話をすると

「そんな楽しいこともあったのか。」

呆けて忘れてしまうということはホントに勿体ないことだなあ」

と言うようになりました。

さまざまな楽しい記憶も辛い経験も全て捨てて“逝く準備”をする母をみながら
消えていく自然や生き物たちにも思いを馳せる日々が続いています。

消えた記憶

<http://p.booklog.jp/book/125142>

著者：ゆずたちばな

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/showmustqueen315/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/125142>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト